
猫と異世界

香音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫と異世界

【Nコード】

N4542N

【作者名】

香音

【あらすじ】

主人公カヤは目を覚ますと異世界にいた。

帰る方法は試練を乗り越えて飼い猫を見つけることだった。

(前書き)

久々の短編です。

「聞いて。今日、部活の先輩に告白されちゃった。もうびっくり

！皆はバレバレだったって言うんだけど私、全然気付かなかったの。

…黒将、ちゃんと聞いてる？」

黒将は素知らぬ顔でベットのの上に転がっていた。

「はあ、私って鈍いのかな？」

すると、その通りだと言わんばかりに黒将は「ニャア」と鳴いた。

黒将は私の飼い猫だ。真っ黒な毛をした雄猫。中二の春に飼い始

めたから二年近く一緒に暮らしている。

「もういい、私寝るから。おやすみ」

私は目を閉じた。

『カヤちゃん、早く見つけてね。そうしないと家に帰れないから

…』

「…私を呼ぶのは…ダレ？」

変な夢を見た気がする。頭がまだボーっとしていているけど私は目を開けた。すると、視界に広がったのは見たことのない部屋だった。

「起きた、起きた。やくっと起きた」

突然ドアが開き人が入ってきた。ずいぶんとファンシーな格好をしている。

「初めまして僕ジニー。君が新しい挑戦者だね」

「挑戦者？なんのこと？それよりここどこよ？」

ジニーと名乗る少年は私の質問に微妙な答えを返した。

「挑戦者はそのまんまの意味だよ。そして、ここがどこかと聞かれても僕は正確な答えを知らない。一つ言えるのは君のいた世界とは違う世界ってことだけだ」

「違う世界？」

「疑うなら窓の外見てごらんよ」

私は慌てて窓に近づいた。

窓の向こうにあったのは漫画やゲームに出てきそうな異世界だった。

「納得したあ〜？したんだったら僕についてきて」

私は訳も分からずにジニーについて行った。

そうか、まだ夢を見ているんだ。私は自分の頬をつねってみた。
…痛い。

「なに自分の頬つねってんの？それより、ほらついたよ」

つれて来られたのは大きな扉の前だった。

「いったいどこについたの？」

「女王陛下の所だよ」

扉の向こうには大きな部屋。そこが一番奥に豪華なドレスを着た女性が椅子に座っていた。

「初めましてカヤ。私がこの国の女王だ」

「なんで私の名前を…」

女王は微笑んだ。

「知っているさ。貴女は挑戦者だからね」

「さつきから挑戦者って何なのよ？」

「元の世界に帰るためのゲームの挑戦者ということだよ」

元の世界に帰るゲーム？

「ゲームにクリアしないと貴女はここから帰れない。ゲームのルールは簡単。一つはこれから起きる試練を乗り越えること。もう一つは貴女の飼い猫を探し出すこと」

「飼い猫を探すって黒将この世界に居るの!？」

女王はゆっくりとうなずいた。

「ゲームを始める前にパートナーを紹介しよう」

女王が二回手を叩くと扉から真っ黒な髪をした青年が入ってきた。

「彼と二人で試練を受けなさい」

「よろしくねカヤちゃん」

青年はにっこりと笑った。

「試練を受け続けていくうちに飼い猫も見つかるさ。さあ、そのドアをくぐればゲームスタートだ」

女王が指差す方にドアが現れた。

「行くがいい、健闘を祈るよカヤ」

私は青年の方を見た。

「とりあえず行くよ。えっと…アンタ名前は？」

「名乗るほどの名前はないよ。カヤちゃんの好きに呼んで」

「ん〜じゃあクロ。髪が黒いから」

安易なネーミングにクロは若干不満そうだったが名乗らない方が悪い。

私たちは勢いよくドアをくぐった。

ドアを抜けると小さな部屋があった。奥の壁に張り紙がしてある。「えっと、第一の試練女王様のペットと仲良くなれ？」

その瞬間天井から大きな物体が落ちてきた。よく見るとそれは毛むくじやらの丸い生き物で鋭い爪と牙を持っていた。

「あれ女王様のペットだよカヤちゃん」

「はああああああああああああああああああああああ」

あれが、あの魔物的な生物がペット！？金持ちの考えることは分からない。

「そして仲良くなってなに」

「ほら首輪に鍵が付いてる。あれが次のドアを開ける鍵だよ」
つまりあれが取れるくらい仲良くなれってこと。

「仲良くなるには餌やってみるとかかなあ。でも食べ物なんて無いし…ここはクロを献上するしかないね。あいつ肉食っばいし」

「カヤちゃん冗談キツイよ」

クロの顔は引きつっていた。
でも本当に食べ物なんて…

「あつポツケにクッキーがあった。食べるかな？」
「とりあえずあげてみたら」

私はペットの口にクッキーを投げてみた。クッキーを食べたペットは「もつとくれ」と言わんばかりにこっちを見てきた。しかしクッキーはもう無い。

もしかしてこのままだと私たち食べられちゃう？

「どうしようクロ」

「はあ、仕方ないな…」

クロが腰に差していた刀を引き抜いたと思ったたらそのままペットを切り倒してしまった。

「えっいいいの？こんなことして」

「だって僕らが死んだら意味ないじゃん」

そう言いながら首輪についていた鍵を引きちぎった。

「さあ行こうカヤちゃん」

もう深く考えるにはやめよう。

私たちは次のドアを開けた。

目の前にあつたのはいきなり別れ道だった。目の前の壁にはまたもや張り紙があつた。

「第二の試練、迷路をクリアしろ…ずいぶんと単純ね」

私はさっきの鍵をポッケにしまいながら読み上げた。

天井と迷路を造っている壁には隙間が空いている。立って歩くには十分すぎる隙間だ。私は壁によじ登った。

「何やってんのかヤちゃん」

「何って、素直に迷ってやる必要はないわ。壁の上通って出口に直行するのよ」

「卑怯だよ」

「ペットを切り倒した奴に言われたくない」

私の卑怯な考えによって私たちはすんなり次のドアをくぐれた。

やっぱり部屋の奥には張り紙が貼ってあった。

「最終試練、殺される前に探し物を見つける」

え、殺される前に？

その時、部屋にたくさん兵士が入ってきて襲いかかってきた。

「僕がこいつらの相手をするからカヤちゃんは早く探し物を見つけて」

そう言っただけでクロは刀を構える。

部屋を見渡してみたけど黒将らしき姿は見えない。

刀と刀がぶつかり合う音が部屋に響く。

どうしよう早く見つけないとクロが殺される。

考えるより動く方が早かった。私はクロと兵士の間を割って入っていた。

「カヤちゃん危ないからどいて」

「やだ！だつてあんたは女王様の命令で私と一緒にいるだけでしょ？あんたまで死ぬ必要ない」

するとクロは私を後ろに放り投げ再び刀を構える。

「僕は女王様の命令でカヤちゃんと一緒にいるんじゃない」

「じゃあ、何で」

「カヤちゃんのことを好きだから」

その時クロの刀が弾き飛ばされた。

「僕はカヤちゃんのことをよく知ってるし、カヤちゃんだって僕のことよく知ってるはずだよ」

兵士は今にもクロを刺し殺そうとしていた。

「…もしかしてあんたが黒将なの？」

クロは笑った。

「やっと気づいてくれた。もう遅すぎ。本当に鈍いんだから」
一瞬にして視界が白い光に覆われた。

気が付くと私は自分の部屋のベッドの上だった。横には黒将、もちろん普通の猫の姿だ。

これってもしかして

「夢才子かああああああああああああああああああああ」

ポケットの中にクッキーの代わりに鍵が入っていることに私はまだ気づいていなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4542n/>

猫と異世界

2010年10月9日19時03分発行